

# 子どもの加減行為と育ちの姿

## — 5歳児の姿からの考察 —

大澤洋美\*・福山多江子\*\*・伊澤永修\*\*\*・安見克夫\*\*\*\*  
(東京成徳短期大学) (東京成徳短期大学) (秋草学園短期大学) (東京成徳短期大学)

### 1. 研究の経緯と目的

時代と共に、言語感覚が変化する中で、子ども達のコミュニケーションのぎこちなさが顕在化し、自分の思いを言葉で表現し、相手の意図を正確に理解する力が低下していると言われている。Starthing Strong VI では保育における「プロセスの質」<sup>1</sup>として、子どもの発達、学び、相互作用／やりとり (interaction) の質が着目されている。また、これらの課題を受けて、公益財団法人幼少年教育研究所の言語部会では、社会情動調節スキルの重要性を認識し「幼児の社会情動スキル (非認知スキル) に係る言語感覚の育成」と題して5年前から取り組んでいる。本研究はこれらの研究を基盤し、言語感覚の衰退についての今日的な課題とそれに伴う社会情動スキルに関する課題について認識から、実践的な研究を進めていくことで、子どもの健やかな発達を保証する質の高い保育の実現ながる成果を目指している。

<加減とは>

人は物事をどのように学んでいくのだろうか。いわゆる明示知 (explicit knowledge) というものがある。これは認識している事柄を言葉で説明できるもの、すなわち知識にあたる。一方、言葉にすることはできないが、「知っている」ことがある。これは「できること」(技能) であるともいえよう。身体知の視点から考えると、例えばピアノの弾き方や自転車の乗り方は言葉に置き換えられないが確かに知っており、できることである。ここに身体知の暗黙性が認められる。マイケル・ポランニーは「私たちは言語にできるより多くのことを知ることができる」と述べ、それを暗黙知 (tacit knowledge)<sup>2</sup>としている。ポランニーによれば、暗黙知とは、「身体と事物との衝突から、その衝突の意味を包括＝理解することによって、周囲の世界を解釈する」ものであるという。ポランニーはこの「包括」を知的かつ実践的なものとし、すべての認識は包括の行為から成り立っている、もしくはそれに根ざしているから見なしている。これらのことから、人は身体的行為を経てそれが身体知となる中で周囲の物事やそのつながりを直観していく存在であると考えられる。本研究で用いた「加減」という用語は、「調整」や「調節」などに言い換えられようが、上記のような暗黙知との関連から、物事やそのつながりについて包括的に身体を通して認識していくことを意味している。

本研究は、公益財団法人幼少年教育研究所の言語部会の研究員から構成されており、これまでの研究の成果をもとに研究を進めている。

<これまでの加減行為の研究の経緯>

公益財団法人幼少年教育研究所の言語部会における、幼児期の遊び「加減」の行為が育てる身体知(1)~(4)の研究<sup>3</sup>ではこれまでの研究の過程では、幼児期の遊びから「加減行為」に着目した結果、次のような視点をもつことができた。

○子どもの育ちの中での加減行為

力加減、行為の加減、他者との関係の中での加減、言葉の加減など幼児の遊びや生活のあ

らゆるところに「加減」が存在している。「加減」という視点で子どもの育ちを捉えると、子どもが身体を駆使して物事を包括的に認識している過程をより深く捉えることができる。

#### ○3・4・5歳児の加減行為の相違

3歳児は加減の対象は物が中心であることに対して、4歳児は人が対象である割合が増える傾向がみられた。成長に伴って行為の対象や行為の起因することが、それまでの体験から生まれる予測や知識・感覚が絡み合い複雑になっていると考えることが出来る。自己性を中心にしなが、他者への関りを広げていく3歳児から4歳児の育ちの姿を確認することが出来る。5歳児は経験が積み重なり、その中で自己実現のために必要な行為を獲得し学んだことが加減行為に結びついていることが分かった。

#### ○失敗経験と加減の関係 意識的加減と無意識的加減と深い関係

これ以上力を加えると壊れるとか、だめになるといった経験から、そのものにこれ以上力を加えてはいけない限界点があるということや、逆に、これ以上力を弱めると成功しないと思うようにならない、といった経験からこれ以上力を抜いてはいけない限界点があるということを知ることができるようになっていくことが分かった。さらに、何度かそのような失敗を繰り返すうちに、それぞれの限界点を体感的に知ることとなり、成功するための範囲(zone)を学ぶことが出来る。当然、成功体験も大切な経験ではあるが、加減の学習材料としては、失敗経験がとても大事なものであるということが理解できた。

以上、子どもの言動を「加減行為」という視点から分析的に捉えることは、子どもへの深い理解につながることを明らかにしてきた。

これらの結果は、子どもの言語感覚や大人の言語感覚の獲得環境が次第に衰退していく中で、幼児の社会情動スキル（非認知スキル）を、どのようにして育てていくかという教育の大きな課題を解決につながっていくと考える。

これまでの加減行為の研究の経過を踏まえて、本研究では5歳の加減行為がどのような状況の中で起るのかに視点をおいて、子どもの加減行為と育ちの姿を明らかにしていくことを目的としている。

## 2. 方法

### ◆検討方法 共同研究者のケーススタディーにより、加減行為の抽出及び検討

ケーススタディーの視点

解析1 「好奇心」「粘り強さ」「自己主張」「自己調整」「協同性」などの育ち・学びを支える力（社会情動的スキル）について

解析2 「行動の加減」「気持ちの加減」「力の加減」「言葉（表現）の加減について」

解析3 無意識的な行為 意識的な行為について

解析4 子どもの育ちへの影響について

以上4つ視点からの解析をケーススタディーにて行うことで、子どもの加減行為と育ちの関係について明らかにしていく。

### ◆検討資料 板橋富士見幼稚園

2020年9月～12月 5歳児の自由遊びの映像記録

### 3. 結果

(1) 園庭での自由遊びの場面から ビデオの解析をする

場面1：5歳児トロッコに砂を入れる

<当該場面までの流れ>

トロッコの中に砂が入っている。それに3人の子どもが水を入れている。中の水が多くなりすぎたため、再びその中に砂を入れている。上から砂を入れるため、水が周りに飛び散っている。それでも一生懸命運んで はトロッコの中に砂を入れている。数人の子どもは、水がはねないようにそっとシャベルや入れ物を下の方に位置を変えて入れている。上から入れ物を落としたため、周囲の子どもたちに泥水がはねる。「あーあ」と言いながらも、気持ちをコントロールし、怒らず笑っている。

<子どもの言動>

A男（5歳児）：バシャッと砂を入れる

→高い位置から砂を入れるので水しぶきが上がるが気にしない

B子（5歳児）：そっと砂を入れる

→低い位置から水を入れるので水しぶきが上がらないその様子を見てC男がやってくる。

C男（5歳児）：ふるいの中の湿った砂を入れようとするが、固まっているために入らない。ふるいを斜めにするとふるいが水の中に落ちる。

→周りの幼児は、C男の行為を見て「あーあ」というが、C男の行為を責めることはしない。

#### 解析の視点

解析1 「好奇心」「粘り強さ」「自己主張」「自己調整」「協同性」などの育ち・学びを支える力（社会情動的スキル）について

解析2 「行動の加減」「気持ちの加減」「力の加減」「言葉（表現）の加減」について

解析3 無意識的な行為 意識的な行為 について

解析4 子どもの育ちへの影響について

以下の場面について4つの解析の視点からケーススタディを行った。

#### A男（5歳児）についての解析

解析1 トロッコの中に砂や水を入れて運ぶことに興味をもって友達と一緒に関わっている。

解析2 水がはねないようにしようという意識はないために、力の加減をせずに砂をトロッコに入れている。

解析3 水がはねないようにしようとする意識的な加減は見られない。砂をトロッコに入れるという行為は意識的な行為している。

解析4 水しぶきが上がることはA男にとって加減が必要であることではなかったのかもしれない。水しぶきが上がった経験が次の行為の時に、水しぶきが上がらないように加減をしながら砂を入れるという行為につながる可能性がある。

### B子（5歳児）についての解析

- 解析1 トロッキの中に砂や水を入れて遊ぶことに興味をもって関わり、A男の行動を見ている。
- 解析2 砂を入れるときに水が飛び散っていないことから、加減をしながら砂を入れているととらえることができる。
- 解析3 水がはねないように意識的に加減をしていることが分かる。
- 解析4 A男の行為を見て、水が飛び散らないうようにしたいという思いをもったため、意識的に砂を入れる高さや入れるときの力を加減している。自分の行為の前に見た経験を活かして、高さの調節や力の強さなど複雑な行為を統合させる行為することで、加減の感覚を習得している。

### C男（5歳児）についての解析

- 解析1 トロッキの中に砂や水を入れて遊ぶことに興味って、A男 B子の行為を見て自分なりに関わろうとしている。
- 解析2 ふるいの中の砂をトロッキに入れようとしたが、予測通りにトロッキに入らないためにふるいを斜めにするので加減をしていることがとらえられる。
- 解析3 水が飛び散らないうように意識的に加減をしながらふるいの砂を入れようとしている。
- 解析4-1 C男はA男とB子の様子を見て、意識的に砂を入れる高さや入れるときの力の加減をしたが、砂の状況が異なっていたことから予測通りには砂が入らなかった。そのため、ふるいを斜めにする加減を加えた。うまくいかないことに会うことで、さらに思考し意識的に加減を加えることで加減の感覚を習得している。
- 解析4-2 C男の行為を見て、周りの幼児は「あーあ」と言うが、C男の行為を責めることはしない。このことから他事の行為に対する意図が分かりそれに対する評価を「あーあ」という言葉であらわしているが、その行為を責める様子は見られない。意識的な加減の行為が予想通りにはいかないことの体験が、友達の行為の理解につながり、言葉や行為の加減につながるのではないかと推測される。

### 場面2：片付けの時間の場面から

#### <当該場面までの流れ>

片付けの時間になった。砂を入れたB子が、砂をきれいに入れたトロッキを引くが、重いためになかなか進まない。それを見ていたA男とC男が押している。トロッキを砂場の近くに運び、手で砂をかき出して砂を砂場に戻している。砂が固くなっていたので、B子が水を入れることを提案する。トロッキを立てて水と砂をかき出している。まだ上手くかき出せないため、A男が水をもってきてトロッキの中に入れていく。

#### <子どもの言動>

A男（5歳児）：「俺もうやんない、明日にする」

B子（5歳児）：トロッキを引きはじめる。

C男（5歳児）：B子の様子を見て、B子の引くトロッキの後ろを押し始める。

→B子の様子を見て自分が手伝おうと考える。

A男（5歳児）：B子とC男の様子を見てB子のトロッキを押しにくる。

→一度やめたけれど自分も仲間だという思いをもっている。

#### A男（5歳児）についての解析

- 解析1 A男は片付けの時間であることを理解し遊びに区切りをつけている。その後、どのように行動をするかを考えている。一度、「俺もうやんない」と言うが周囲の様子を見て再びトロッコを押しに戻っていることから「自己調整」の力が育っていることが分かる。
- 解析2 B子とのバランスを考えて「力の加減」をしている様子が認められる。
- 解析3 「俺もうやんない」の言葉の後、その行動を変えトロッコを押している様子から、意識的に力の加減をしている。
- 解析4 片付けという条件が加わったことで、より複雑な状況に対処するためにこれまでの経験やその場の状況を合わせて行動するときに、意識的な加減がされることが認められる。

#### B子（5歳児）についての解析

- 解析1 B子はトロッコの砂をかきだすために、砂場の近くにトロッコを運ぶために自ら積極的に行動する様子から、これまでの園生活の経験を活かして行動していることが分かる。
- 解析2 B子は、トロッコを動かしたいという気持ちから思い切りの力でトロッコを引いている。ここでは力の加減等は必要とされていない状況であることが分かる。一方、A男とC男がトロッコを押してくれた時には力の加減をしていることがその様子からとらえられる。
- 解析3 B子は、一人でトロッコを引くときとA男とC男がトロッコを押してくれた時の力の加減をしていると思われるが、反射的な無意識の加減であることがとらえることができる。
- 解析4 B子は、力の加減が不要な状況と必要な状況に連続して出会っている。この状況の中もとでは無意識的に力の加減をしていることが分かるが、この無意識的な加減はこれまでの経験によるものではないかと考えられる。

#### C男（5歳児）についての解析

- 解析1 C男は、片付けの状況が分かり、自ら片付けに関わるとともにB子のトロッコを押すという行動に対して必要なことを考えて協同していることが分かる。
- 解析2 C男は、B子の行動やA男の行動についてとらえて、トロッコを押す力の加減や押す場所についての調整を行っていることが分かる。
- 解析3 C男は、B子を手伝うことによってトロッコを動かしたいという思いはあるが、そのことがトロッコを押す行為にはつながっていない。無意識的に力の加減をしているようにとらえられる。
- 解析4 C男の力の加減については、無意識的であるととらえられるが3人で力を合わせることで力の加減が変化することを体験している。

場面3：片付けの場面の続き（3歳児とのかかわり）

前場面に引き続き

トロッコの中の砂を少し減らしたところで、再びトロッコを引き始めるA男B子C男だが、うまく方向がコントロールできなく木にぶつかる。その後、少しトロッコを動かして砂場のわきに到着する。3人で砂をかき出し始めたところで、3歳児D男が黄色いプラスチック製のダンプカーを差し出して「これに入れてください」と言う。B子はそのダンプカーの荷台に砂を入れる。

D男（3歳児）：「泥配達ですか」5歳児の3人は答えずに砂をかき出している。

→3人はD男の言葉を聞いてはいるが答えず黙々とかき出す。

D男（3歳児）：「ここに入れてください」とダンプカーの荷台を差し出す。

→D男は自分がやりたいことだけを伝えている。

D男（3歳児）：ダンプカーの荷台に砂を投げ入れる。

C男（5歳児）：B子に砂をトロッコから乗り出しながら手渡しする

B子（5歳児）：B子は受け取ってD男のダンプカーに入れる

C男（5歳児）：B子に砂を投げる

→乗り出して渡すのが面倒になった。

B子（5歳児）：「投げるのはダメだよ」

→怒っているそぶりは見せない。黙々と砂をかき出している。

#### B子（5歳児）についての解析

解析1 B子は、片付けの時間であることと片付けるためにトロッコを運んできたことから、片付けという状況に応じて場に応じて行動する力を発揮している。C男の要求に対しても初めは応じずに様子を見ていることがとらえられる。

解析2 B子は、D男の様子とC男の様子をとらえながら行動していることから、気持ちと行動を加減してD男への対応をしている。

解析3 B子の気持ちと行動により、D男に嫌な思いをさせていないが意識的に行っている様子は見られないため無意識的な加減だと捉える。

解析4 4人のかかわりの中で、無意識的に相手を意識して、行動を制御したり言葉で表したりすることが自分たちの遊びも相手によってもプラスになる方向を身につけて行動する力につながっている。

#### C男（5歳児）についての解析

解析1 C男は片付けの時間を認識しながらも3歳児のC男の要求に応えるべく行動をとる様子が見られる。

解析2 C男は片付けなくてはならないことを理解しながらD男の要求にも答えていることから気持ちの加減をしていることがとらえられる。

解析3 C男もD子と同様に状況に応じて行動しているが、相談をした様子は見られないことから無意識的に「片付けの時間ではあるが、これくらいまでは付き合いあげたほうが良い」というような「気持ちの加減」をしているととらえられる。

解析4 気持ちと行動の加減をすることが、相手の気持ちを尊重することや自分たちにとっ

でも有用感があるという経験から、このような行為をすることができるようになると考えられる。

#### D男（3歳児）についての解析

- 解析1 5歳児の行為に興味を持ち関わっているが、片付けの時間であることへの意識と必要な行為への理解が浅い。
- 解析2 言葉、行為共に加減をしている様子は見られない。
- 解析3 意識的・無意識的な加減行為は見られない。
- 解析4 C子に「投げるのはダメだよ」と言われた経験が次の行為につながってくるのではないかと予想される。

(2) 場面1～場面3の解析1～解析4から子どもの加減行為と育ちをとらえる

解析1 「好奇心」「粘り強さ」「自己主張」「自己調整」「協同性」などの育ち・学びを支える力（社会情動的スキル）について

- A男B子C男にトロッコの中に砂や水を入れて運ぶことに興味をもって友達と関わる遊びの中でみられる「好奇心」片付けや3歳児とのかかわりの中でみられる「自己調整」「協同性」を多らせることができた。

解析2 「行動の加減」「気持ちの加減」「力の加減」「言葉（表現）の加減」について

- A男B子C男に砂をトロッコの中へ入れるときにいから「力の加減」や「行動の加減」がみられたが、その方法や結果はそれぞれが違っていた。
- 「気持ちの加減」は、内側に受けられた加減と相手の行動に対しての加減があることがわかった。片付けのような園生活に必要なルールを受け入れて行動するときには、自分の気持ちの中に折り合いをつけて行動する必要が生じるため自己と向き合い「行動」を加減する必要が出てくる。また、3歳児との対話の中では自分より小さい子への理解とともに「気持ちの加減」をして相手に対応することが必要な行動をしていることが認められた。
- A児の砂を入れる行為が「言葉の加減は」うまくいかなかったときに「あーあ」と周囲の幼児の言葉があったが、それ以上は追及しない「心の加減」と伴っていることがその様子から確かめられた。また、3歳児に対してのB子の「投げちゃダメ」も端的な内容のみであることから、相手の状況の理解を伴っての言動であることが確かめられる。

解析3 無意識的な加減の行為 意識的な加減の行為 について

#### ◆無意識的な加減の行為

- 「片付けの時間ではあるが、これくらいまでは付き合っただけのほうが良い」という加減では、意識をして行動する様子は確認できない。
- C子は、一人でトロッコを引くときとA男とC男がトロッコを押してくれた時の力の加減をしていると思われるが、反射的な無意識的な加減であるととらえることができる。

#### ◆意識的な加減の行為

- 水が飛び散らないようふるいに角度をつけながらふるいの砂を入れようとしていることから意識的に加減をしていることが分かる。
- 「俺もうやんない」の言葉の後に自らの行為を捉えなおすことによって、意識的にトロッコを押すことに加わっていることから、意識的に力の加減が可能になっていることとらえる

ことができる。

#### 解析4 子どもの育ちへの影響について

- 水しぶきが上がった時に不都合を感じた体験が、水しぶきを上げないように行動したいという動機づけになり、水しぶきが上がらないように加減をする。その時に高さや角度について加減をする。ここまでは意識的に行っているといえる。またその時に、高さなど複雑な行為を統合させる行為することで、加減の感覚を習得している。
- C男の行為を見て、周りの幼児が「あーあ」といった言葉とC男の行為を責めることはしない様子は、5歳児がこれまでの体験の中で学んだことを総合的に含んでいると捉えることができる。加減の行為に至るまでには様々な体験が結びついていることを捉えることができる。
- トロッコを思い切り引いていた状況から友達が後を押してくれる状況が乗ることにより、力の加減が不要な状況と必要な状況に連続して場面では、無意識的に力の加減をしている様子がとらえられる。ここでの無意識的な加減はこれまでの経験が大きく影響していると考えられる。
- 意識的に加減をする要因として、複雑な状況に対処する必要が出てきたときであることも分かってきた。また、意識的な加減を可能にするためにはに多様な体験の中で様々な状況に出会うことが重要であると考えられる。

## 4. 考 察

子どもの加減行為と育ちの関係について探るために、本研究では4つの視点からの解析をおこなった。加減行為は子どもの遊びの中の様々なところに存在をしていることがケーススタディーを通して改めて確認された。加減の種類についても動作の加減から心の加減まで様々な存在しその一つ一つが子どもの体験を大きくかかわっていることも確認することができた。これまでの研究では5歳児は、それまで行った経験が積み重なり、その中で自分なりに学んだことによって加減行為が実現されることが分かってきていた。このことを確認するとともに、より一層複雑な関係のもとで加減行為は行われていることが分かってきた。また、予測できないことに出会う経験が次の加減行為を誘引させる一要因であることも明らかになってきた。人とのかかわりが希薄になりAIがこれまで人が触れ合いながら行っていたことに代わる中で社会情動スキルの育ちが求められる今日、様々なつながりや重なりが必要となる加減行為は子どもの育ちにとってますます重要な役割を果たすと考えられる。また、無意識の加減と意識の加減はどこから起因してどの段階で変化するのか、変化しないのか等についても5歳児の遊びの姿から注目すべき視点であることが分かった。3・4歳児の加減行為を解析することによって、無意識と意識の加減の起因より一層深く探っていきたい。

今回の解析では、予測通りに加減ができること、予測通りに加減できないこと、予測ができない咄嗟の加減等、子どもが加減行為に至る過程の複雑さも見えてきた。また、予測できない物事に出会ったときの体験や思い通りにいかなかったときの体験が次の加減行為に結びつくことも分かってきた。しかしながら、今回の研究で解析できたのは限られた場面の記録である。今後は様々な場面の記録から子どもの遊びや生活の中にみられる加減行為を解析することで、子どもの加減行為中に、子どもに求められる社会情動スキルを習得する様々な要



素が含まれていることを明らかにすることで、保育・教育の指導に生かされていくと考える。

#### 参考引用文献

<注>

- <sup>1</sup> ISS VIから学び考える 日本の幼児教育・保育のこれから 2019年9月10日 2021年度発達保育実践政策学センター公開シンポジウム資料
- <sup>2</sup> マイケル・ボランニー著、高橋勇夫訳 『暗黙知の次元』 筑摩書房、2017年、18、80、85、94頁。
- <sup>3</sup> 幼児期の遊び「加減」の行為が育てる身体知(1)～(4) 日本保育学会ポスター発表 2018年～2021年  
岩田純一 『子どもの発達の理解から保育へ ― <個と共同性>を育てるために』 ミネルヴァ書房、2011年。